天守に宿泊 殿様気分

大洲城

市が実験「1日1組、1泊100万円」

大洲市は2020年4月から、大洲城の天守に宿泊できる「キャッスルステイ(城泊)」を始める。甲冑姿で白馬に乗って入城し、櫓から月をめでるなど城主気分が味わえる趣向だ。1日1組(4人程度)限定で、1泊100万円以上を予定しており外国人客らの誘致を目指す。

(梶原善久)

家臣らが迎える本丸に白馬で入城する城主役(いずれも8日、大洲市の大洲城で)

高欄櫓で食事など 伍代夏子さん体験

大洲城天守は4層4階の木造建築。かつては大洲藩6万石の藩主の居城で、明治の廃城令を機に1888年に取り壊されたが、当時の写真や模型などを基に15年前に復元された。

8日には、城の指定管理団体の職員が宿泊体験する実証実験を実施。大洲市の肱川あらし観光大使で歌手の伍代夏子さんが招かれた。

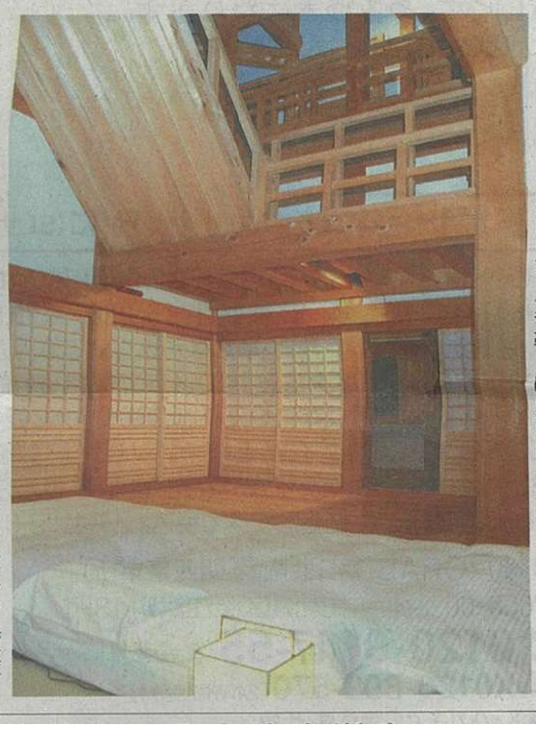
実験では、甲冑姿の城主に扮した職員が白馬に乗って入城し、大洲藩鉄砲隊が祝砲で出迎えた。伍代さんは城主証を受け取り、家老役の案内で城としては珍しい吹き抜けになった内部構造や、城郭の絵図面の説明を受けて往時の城主に思いをはせていた。

本丸では地元の神楽が上演され、重要文化財の高欄櫓で伍代さんは地元産の野菜や瀬戸内の魚介類を使った食事に舌鼓を打った。

高欄櫓で地元産の食材を使った料理を味わう伍代さん

伍代さんは「現実ではない贅沢な時間が過ごせるので、日本の若い人にもぜひ楽しんでもらいたい」と話した。

開業時には、天守1階が寝室となり、中央部に畳を敷いて障子戸で囲うほか、風呂は、二の丸に設ける。キッチンやトイレは車で対応する。この日の実験では、市職員らが宿泊し、非常時の経路や誘導灯など防災、衛生面などを確認した。



吹き抜けになった天守1階に設けられた寝室

市によると、市内には城下町の町家や文化財の観光施設が多く残っており、観光産業と経済の振興を目指している。城泊の開業に合わせて別荘として建てられた「臥龍山荘」(重要文化財)の活用も計画する。一方、民間業者は市内の古民家8棟を宿泊施設やレストランに改修している。

城泊は一般公開後の午後5時～翌朝9時で、市は収益金の一部を文化財の観光施設の保全に役立てることにしている。

城泊を運営し、古民家の宿泊事業で実績を持つ「バリューマネジメント」(大阪市)の他力野淳社長(46)は「見るだけでなく活用する事業による経済効果で、街の活性化につなげたい」と話している。